

支部横断企画

報告者 荒川恒子(東日本支部)

「バンバン! ケンバン はままつ」

2012年10月20日、21日(主催: 静岡文化芸術大学) 企画代表: 小岩信治

2日間の行事の内、21日しか参加できなかったことは、本当に残念である。しかし絶好の日和だったので、朝一番のワークショップから覗き、丸一日堪能しながら、自分の居場所であるクラシック音楽界の現状に想いを馳せた。まずこの日の私の行動は以下の通りである。

10:00 ワークショップ 調律「ピアノの音の造り方」

村上達哉氏(株式会社河合楽器製作所・Shigeru Kawai ピアノ研究所原器課課長)

(使用楽器: 河合楽器透明グランドピアノ)

10:50 ジャズピアノ・リモートライブ「インターネットでつなぐピアノの遠隔ライブ」

(ヤマハ掛川工場と結んで) 演奏: ブルース・スターク

(使用楽器: ヤマハ自動演奏機能付きピアノ Disklavier)

11:15 ライブ・コンサート「熊埜御堂可奈子 + MASAKing」

(使用楽器: ホームオルガン(ローランド社ミュージック・アトリエ(AT-900C)、ローランド社電子ドラム(V-Drums Lite HD-3)、およびハンドソニック(HandSonic 10))

12:00 シンポジウム「オルガンの文化史」パネラー: 田中健次、三木純一、大野弘光、

司会: 奥中康人 (紹介楽器およびデモンストレーション楽器: ローランド社電子クラシック・オルガン、鈴木楽器ハモンドオルガン)

13:30 ライブ・コンサート「ヒカシュー」

使用楽器: テルミン、コルネット、口琴、ホーメイ、エレキギター、エレキベース、シンセサイザー(KORG DW8000)、ピアノ、バスクラリネット、ドラムス

14:00 講演「シンセサイザー開発史」国本利文(ヤマハ株式会社研究開発センター長)

15:00 シンポジウム「キーボードのこれから」パネラー: 宇田道信、吉田洋、三枝成彰、大矢素子 コーディネーター: 根本敏行、羽田隆志

16:00 コンサート「ロバの音楽座」

使用楽器: リコーダー、クルムホルン、セルパン、フォークフルート、コルネット、リュート、サズ、プサルテリー、サントウール、ルネサンスギター、ハーディ・ガーディ、足踏みオルガン、ポルタティーヴ・オルガン、各種太鼓

(なお以上は企画に沿った時間ではなく、筆者が参加し始めた時間である)

今さら「調律」のワークショップでもなかろうと考えつつ、覗いてみた私は仰天してしまった。河合楽器を代表し、ショパン・コンクールやチャイコフスキー・コンクールで活躍するヴェテラン調律師、村上氏が見かけも美しい河合の透明グランドピアノを用いて、整調と整音の説明しておられたからである。この日は多くの作業の内、ハンマーに針を刺し、フェルトの形を整え、音色、音量を揃える作業を実践して下さった。いとも簡単に見えたが、中年の女性見学者が勧められるままに試し、「かぼちゃを切る位硬い」と感想を洩らされた。いとも簡単に見えた針刺しは、注意力と的確な判断、そして腕力のいる作業なのだ、と皆で実感を共にした。

さてこの行事は静岡文化芸術大学に勤務する小岩信治氏が、文化政策学部の学生の自主性を重んじつつ指導・運営した企画である。小岩氏の弁によると、「楽器の街浜松の文化史、産業史に目を向け、さらには中心市街地のにぎわいに貢献したい、という学生の思い」を形にしたものである。さらに同大文化・芸術研究センター長で、企画の総監修者、三枝成彰氏は「すべてを学生に委ねる」というコンセプトで、「まっさらな状態から、学生がプロデュースした音楽祭」と称しておられる。高い質を誇りながらも、産業という面では厳しい現実を突きつけられている業界、またほとんど日本の全ての地方都市が腐心する街の活性化等に対し、河合楽器製作所、教育楽器の分野で活躍する鈴木楽器製作所、電子楽器のローランドそしてヤマハは、社を挙げての協力体制を組んだ。また場所の提供、企画への乗り入れということでは、大学以外にも浜松楽器博物館、アクトタワー内特設会場、浜松市民映画館シネマイーラ、ヤマハミュージック東海浜松店(かじまちヤマハホール)等が参画し、同時進行でコンサート、ワークショップ、シンポジウム、講演等を開催した。

日本音楽学会としては、支部横断企画に採択し、学会という立場から講演とシンポジウムを助成した。そこで参加した筆者に期待されるのは、講演とシンポジウムを聞き、批評するというものである。しかし筆者は、特にそのように明記されたセッションだけでなく、行事全体が、役割を分担しているように感じられた。そこで当日配られた冊子を参照しつつ、全企画を御紹介しておこう。なお冊子の内容は、学生による演奏者の紹介記事、演奏者からのコメント、演奏曲目、使用楽器、ちょっとした豆知識のコーナー等からなり、一般の聴衆はもとより、音楽に携わる者にとっても学ぶ所は多い。ここに音楽学の勉強は活きていると感じる。

1) ピアノの歴史をたどろう — クラヴィコード、チェンバロ、歴史的ピアノ、ピアノ連弾 (CD などなかった時代の交響曲等の楽しみ方)、ピアノ(木村かおり氏の演奏でページ、一柳、ブルーゼズ、武満、メシアン)

2) デジタルなケンバン — 電子ピアノ、電子オルガン、シンセサイザー、オンド・マルトノ

筆者は聴けずに残念だったが、横山幸雄氏がローランドのデジタルピアノ「V-Piano Grand」でシューマン、ショパン、リストを演奏した。氏は「Vピアノに代表される楽器が表現する世界は、自分の子供の頃には予想もできなかったクオリティーをもち、また今後も進化を続けるだろう」と述べ、最新の楽器開発技術に強い関心を持ち、またその可能性を楽しみにしている、と結んでおられる。

3) あれもケンバンこれもケンバン — アコーディオン、鍵盤ハーモニカ、鍵盤リコーダー、足踏みオルガン、ハーディ・ガーディ等。

4) ケンバンにさわろう！学ぼう！ワークショップ — クラヴィコード、チェンバロ、メロディオン、調律

5) 多数の無料ミニ・コンサート

6) 映画 X ケンバン — 電子オルガン、ピアノ演奏による無声映画音楽実演(演奏は柳下美恵氏他)

7) 講演とシンポジウム

講演 1. 電子楽器: ヤマハはエレクトーンから 2. メロディオンとアンデス(鈴木楽器製造の鍵盤ハーモニカと鍵盤リコーダー) 3. ピアノの発達と浜松(河合楽器)

4. 浜松のピアノ産業調査中間報告(学会員 平野昭氏他) 5. シンセサイザー開発史(ヤマハ)

シンポジウム

1. 大正琴の文化史 2. 鍵盤楽器の開発と芸術表現 3. オルガンの文化史 4. キーボードのこれから

まず驚きは「ケンバン」というテーマで、これほど広範なジャンルを網羅し、しかもあらゆるジャンルの演奏、講演等に第一人者を招聘したことである。博学の小岩氏をもってしても、人選から始まり、交渉の過程を一人でこなすことは難しい。学生各自の興味の多様さ、アンテナの張り方、この企画に対する情熱等なくして、これほどの人材が集まることはあるまい。なお講演の大部分は、楽器産業の現場で、自らが開発・振興等に携わってこられた、まさに前線に立つ人たちの経験談である。同じ社内でも入社時期がずれたり、分野が異なると、知らないことは多い。この機会に先輩の話聞いて、改めて学ぶ所が多かったというコメントがあった。またライヴアル会社の人を前にしての講演は、日本では珍しい。このような企画あってこそ出来た、良い意味での競争と刺激を感じる。普段はほとんど聞くことのできない講演内容ばかりであった。

シンポジウムに関しては、筆者は3.「オルガンの文化史」と4.「キーボードのこれから」の一部に参加した。3.に関してはローランド社の三木純一氏が、オルガンの定義、電子クラシック・オルガン開発に至るまでの、日本におけるオルガン事情、鈴木楽器製作所の大野弘光氏が、長年携わってこられたハモンドオルガンの歴史、日本への輸入、使用の場等を実演付きで説明、田中健次氏は、日本における音楽人口の変遷、楽器購入(オルガンに限らず、ピアノも含めて)の実態、そこに見られる現象の原因等の解明に努められた。各自の話は講演としては、いずれも興味深いものであった。しかしこれは音楽学者のためのシンポジウムではない。老若男女に対する公開のディスカッションであるはずである。まずターゲットとすべき聴衆の絞り方と話題の提供の仕方は難しい。さらに基督教の精神世界の象徴としてのオルガンが、その背景を持たない日本に導入される場合の問題点を語ることを、シンポジウムの目的に掲げている。司会者が軌道修正をしようと、かなり無理な試行錯誤をした感は否めない。それは4.にも感じられることであった。鍵盤楽器といえば「ピアノ」、それも「ピアノでクラシック音楽を演奏する」が王道と、いつの間にか世間で固定観念ができていっているらしい。この閉塞感に満ちた世界に、より自由で闊達な風穴を開けたい、ということが、このシンポジウムでの中心課題であるらしい。それだからこそ、コーディネイターは出たとこ勝負で語るという姿勢を取ったのであろう。しかし闊達に語り合い、議論の白熱するシンポジウムを成り立たせるのは、至難な業である。そこで途中で失礼し、「ロバの音楽座」でみんなと音楽を楽しみ、ほっとした。一家でこれを鑑賞した人は多い。このコンサートを企画した学生は、10歳の頃「ロバの音楽座」を聴いて、いつの日にか、浜松の人達のために招きたいと考えていたとのこと。その願いは通じた。

以上報告記のような批評となってしまった。しかしシンポジウム4.への応えは、まさにこの企画全体の内容が指し示していたのではあるまいか。現代日本の音楽界、特にクラシック音楽界を取り巻く諸問題を浮き彫りにし、実感を持って音楽研究に携わるテーマを与えてくれた機会と感じるのである。そしてこのような企画が実現できたことは、小岩氏

の日頃の研究、実践活動、問題意識等と、若者世代の興味、関心等がうまく噛み合ったこと、実行以前に音楽学的なアプローチも含めて、しっかりとした話し合いがなされた結果と受け止めるのである。

昨日あまりに楽しかったので、また来たという方が多かった。大して宣伝をしているようにも見えなかったが、楽器産業に携わる住民が多い土地柄である。自然に親子、夫婦、孫を連れてと三々五々に集まり、どこの会場も満員である。なんと初日には1500名も参加したとのこと。参加者の多くは、従来の「ケンバン」に対する意識を一気に広げて、楽しく帰路についたはずである。このような企画を全国的に知らしめるには、広報活動に不十分な点があったことは否めない。しかし継続と積み重ねがあつてこそ、知名度は増すというものである。日本の誇る「楽器の街浜松」のイベントを通して、私達が音楽観を広げ、柔軟な活動を目指すことができるよう、定期的な開催を願ってやまない。